

出典

ジョルジョ・アガンベン著／高桑和巳訳『ホモ・サケル——主権権力と剥き出しの生』(以文社、2003年)
ヴィクトール・E・フランクル著／池田香代子訳『夜と霧』(みすず書房、2002年)
ブリーモ・レーヴィ著／竹山博英訳『アウシュヴィッツは終わらない——あるイタリア人生存者の考察』(朝日新聞社、1980年)
アン・アブルボーム著／川上洗訳『グラーグ——ソ連集中収容所の歴史』(白水社、2006年)
スティーン・A・チン著／金原瑞人訳『正義をもとめて——日系アメリカ人フレッド・コレマツの闘い』(小峰書店、2000年)
立花隆『シベリア鎮魂歌——香月泰男の世界』(文藝春秋、2004年)
山口県立美術館監修『香月泰男シベリア画文集』(中国新聞社、2004年)
香月泰男美術館 <http://www.city.nagato.yamaguchi.jp/~kazukiyasu/>
山口県立美術館 <http://www.yma-web.jp/index.html>
石原吉郎『石原吉郎詩文集』(講談社文芸文庫、2005年)
石原吉郎『望郷と海』(筑摩書房、1972年)
内村剛介『失語と断念——石原吉郎論』(思潮社、1979年)
畑谷史代『シベリア抑留とは何だったのか——詩人・石原吉郎のみちのり』(岩波ジュニア新書、2009年)
ソルジェニーツィン作／木村浩訳『収容所群島1—6』(新潮社、1974-1977年)

これは『雪山』ですね。シベリアの雪は、綺麗でもあるわけですね。これは『星“有刺鉄線”夏』。短い夏のシベリアの星空が美しい。ただ下に有刺鉄線がある。だからとらわれの身だということはいや応なく感じざるを得ない。これは『マイナス35度』という絵です。マイナス35度より寒くなると、収容所にいる人たちは仕事をしなくていい、休みになるんです。だから嬉しいわけです。もう1つ、この『北へ西へ』という絵は一番有名な絵かもしれません。これは列車です。日本兵が貨車に詰め込まれて運ばれた。彼らはどこに行くか最初、分からなわけです。日本に帰れるかもしれないと思って期待して乗って詰め込まれている。やがて太陽の位置から方向が分かります。列車が南に向かって走っていったら日本に帰れるわけですが、列車は北西に、イカル湖の方に向かっていく。『北へ西へ』、これは絶望なんです。

去年ちょうど山口県立美術館が一挙に57点を見せ回顧展をやりました。これは圧倒的です。色はモノトーンですけど、すごく美しいです。香月泰男の本を読むと、もうこれでシベリアはやめようと、でもまたキャンパスに向かうとシベリアのことしか出てこない。書いてあります。生きていくためにはシベリアを描かすにはいられない。彼は決して政治的な人ではありません。彼は単に描いているわけです。さっきの『朕』というのも天皇制批判のための絵ではありません。でも結果としてもすごく鋭い絵になるわけです。シベリア体験がなかったらこれは出てこなかった。シベリアに行ったことは不幸なんです、その運命を創作活動に持っていったということですね。

あともう1人、石原吉郎という詩人がいます。この人も11年間、大変なシベリア体験をした。裁判で戦争犯罪人にされて、刑期を終えて日本に帰ってきたんです。帰ってきて詩を書いた。書かすにはいられなかったわけですね。シベリアに抑留された人の経験は大変です。三重苦です。まず徴兵されて戦争に行ったという苦があり、次に抑留されて収容所でこき使われたという2番目の苦があり、3番目は幸運にも帰ってきたら日本で差別されたという苦があって三重苦です。シベリアから帰ってきた人たちは、冷戦時代には偏見がありましたからかなり悲惨で、石原吉郎は詩を書いて生き延びたわけです。あとソルジェニーツィンという作家がいました、亡命して戻りましたが『収容所群島』という小説を書いています。

戦争を記憶、記録する芸術家

広島を描いた有名な画家がいます。もう亡くなっていますが、丸木位里と丸木俊という夫婦です。彼らが1950年ごろから描いてきた『原爆の図』という15点連作があります。丸木位里さんは広島出身で、原爆投下数日後に広島に行ったわけですね。一言で言って地獄ですね、それを描き続けたんです。この『原爆の図』は、世界的にも有名です。埼玉

県の東松山市に原爆の図丸木美術館というのがあって、今はそこにあります。長崎にもあります。15点連作です。これは水墨画で、屏風みたいになっています。この連作のうち『とうろう流し』というのがあります。これは、8月6日に広島で川に灯籠を流す、それです。これは美しいと思います。彼らはアメリカに原爆の図を持っていったことがあるんですが、そうしたら、被害ばかり言うな、日本は加害者だろうと言われたんですね。そこで、丸木位里、丸木俊夫妻は加害者の面も描くわけですね。南京大虐殺の絵ですね。

それから彼らは先駆的です。原爆と原発を非常に早い時期から一体としてとらえました。『水俣・原発・三里塚』という絵がありますが、彼らはこう書いています。「戦争のとき、広島、長崎の原子爆弾で殺されました。平和になったとき原子爆弾は原子力発電所に化けて出ました。(中略)ある日、日本は強大な原爆保有国に早変わりするのではないのでしょうか」*。これは1980年ぐらいの絵ですけど、原発のところは、よく知られているものです。

音楽の話をする、広島、被爆を題材にした音楽もたくさんあります。2つ挙げると、林光という日本の作曲家の混声合唱組曲があります。『原爆小景』という原民喜という詩人の詩に付けた音楽です。それからポーランドにペンデレツキという作曲家がいます。彼が1959年から1961年のころに書いた『広島犠牲者のための哀歌』は有名な現代音楽です。およそ耳に快い音楽ではありません。鋭い音楽で、これも世界的によく演奏される有名な曲です。

それから、被爆体験を形象化する建築物。広島に行くと、広島平和記念資料館と平和記念公園というのがあります。設計したのは丹下健三です。[広島平和記念資料館のHPを映写]。彼は平和記念公園も設計しているんですが、それが重要です。平和記念資料館から原爆ドームに向かって一直線に視野が開ける、そういうふうな空間を構成しているわけです。もう1つ、実現しなかった案があります。白井晟一という建築家がありました。[図版を映写]。1954年、ビキニ環礁沖で第五福竜丸が被曝したあと、彼は「原爆堂計画」というのを作りました。プランだけでも、書かすにはいられなかったんですね。彼の建築では水が重要で、水が平和を表しているのですが、そこに核エネルギーの象徴みたいなものが載っています。人間はこの悲劇的な核エネルギーをどうコントロールし得るのかを問い掛けていると、後の人からは解釈されています。建築家が戦争と平和を語る一例です。

あと彫刻のお話も。私は立命館なので立命館が持っている本郷新という彫刻家の作品2つを紹介します。『戦没学生記念像くわだつみのこえ』というのがあります。青年の裸体像です。本郷新の作品では『無辜の民』という作品がありますが、これもすごくいい作品です。

*丸木位里／丸木俊『原爆の図』より

出典

丸木位里／丸木俊『原爆の図』(小峰書店、2000年)
小沢節子『「原爆の図」——描かれた<記憶>、語られた<絵画>』(岩波書店、2002年)
原爆の図 丸木美術館(埼玉県東松山市) <http://www.aya.or.jp/~marukims/>
『上野誠 平和版画集 原爆の長崎』(新宿書房、1970年)
ひとミュージアム上野誠版画館(長野県長野市川中島町) <http://hito-art.jp/>
『ヒロシマと音楽』委員会編『ヒロシマと音楽』(汐文社、2006年)
林光『混声合唱組曲 原爆小景』『原爆小景(完結版) 林光合唱作品集』(CD、フォンテック、FOCD9186、2003年)
ペンデレツキ『ヒロシマの犠牲者のための哀歌』Krzysztof Penderecki, Threnody for the Victims of Hiroshima (1959-61) Polish Radio National Symphony Orchestra, Conducted by Krzysztof Penderecki (CD, EMI Classics, 5 65077 2, 初出1976年、CD1994年)
Luigi Nono, Canti di vita e d'amore—Sul Ponte di Hiroshima (1962) (ヒロシマ・ナガサキへの原爆投下50年に際してのIPPNWコンサート、モーツァルト「レクイエム」+ノーノ「愛と生命の歌——ヒロシマの橋の上で」、ドイツ青少年オーケストラ、ベルンハルト・クレイ指揮、1995年、CD, ARS MUSICI, AMP5059-2)
白井晟一『原爆堂計画』(1954-55年)
『白井晟一 精神と空間』(青幻舎、2010年)
丹下健三「広島平和記念公園、広島平和記念資料館」
http://www.arch-hiroshima.net/arch-hiroshima/arch/delta_center/p-museum.html
ミック・プロデリック編著『バクシャ・シネマ——日本映画における広島・長崎と核のイメージ』(現代書館、1999年)
本郷新(1905-1980)戦没学生記念像くわだつみのこえ>(1950年制作)
<http://www.hongoshin-smos.jp/sculpture/wadatsuminokoe.html>
「8人兄弟」。兄弟たちは、本郷新記念札幌彫刻美術館(札幌)、北海高校(札幌)、長万部平和祈念館、世田谷美術館、神奈川県立近代美術館、和歌山市民体育館、立命館大学国際平和ミュージアム、立命館大学朱雀キャンパス貴重品保管庫(破壊された「長男」)に立っている。
日本戦没学生記念会編『新版 きけ わだつみのこえ』(岩波文庫、1995年)
日本戦没学生記念会編『新版 第二集 きけ わだつみのこえ』(岩波文庫、2003年)